

高岡城（国史跡, 百名城）（高岡市古城）（高岡古城公園）

高岡城（たかおかじょう）は、富山県高岡市古城（旧・越中国射水郡関野）にあった日本の城（平城）。現在、城跡は高岡古城公園（たかおかじょうこうえん）として整備され、市民の憩いの場となっており、国史跡に指定^[1]されているほか、桜の名所としても有名で日本さくら名所100選に選定されている。

歴史・沿革

1605年（慶長10年）6月28日、富山城に隠居した初代加賀藩主・前田利長は4年後の1609年（慶長14年）、富山城下の町人地から出火した火災の類焼により城内の建築物の大半を焼失したため、利長は魚津城に移り、大御所徳川家康と将軍徳川秀忠に火災の報告と、関野に築城の許可を貰う。

利長は築城の方針に伴うため、資材調達を小塚秀正ら、現地奉行を神尾之直らに命じ、魚津城から築城の指揮を取り、同時に城下町の造成も始めた。縄張（設計）は当時の前田家の客将だった高山右近とされている。同年9月13日、利長は「関野」を「高岡」と改め、未完成の高岡城に入城した。殿閣は先代利家が豊臣秀吉から賜った豊臣秀次失脚に伴い破却された伏見城秀次邸の良材を使って建てられたとも伝えられる。しかし、1614年（慶長19年）5月20日に利長は死去（享年53）し、隠居城として使われたのはごく短期間であった。その翌年の1615年（元和元年）には一国一城令により、大坂夏の陣からの利常凱旋を待つて高岡城は廃城となり、越中国の令制国としての城機能は火災から再建された富山城に移ったとされる。ただし、廃城時期については1638年（寛永15年）とする異説もある。

しかしながら、廃城後も高岡町奉行所の管理下で、加賀藩の米蔵・塩蔵・火薬蔵・番所などが置かれ、軍事拠点としての機能は密かに維持された。これは加賀藩の越中における東の拠点であった魚津城も同様であった。街道の付け替えの際には、濠塁がそのまま残る城址を街道から見透かされるのを避けるため町屋（定塚町）を移転して目隠しにしたといわれる。また、廃城後に利長の菩提を弔うために建立された瑞龍寺や周囲に堀を備える利長の墓所自体も高岡城の南方の防御拠点としての機能を併せ持つものとして配置されたと考えられている。なお、江戸時代の古図の中には城址を「古御城」の名称で記しているものがある。

城内におかれた米蔵等は1821年（文政4年）の高岡大火の際にはほぼ全焼したが、その後再建され明治に射水郡議事堂が建設されるまでであったという。

2006年（平成18年）4月6日、高岡城は日本城郭協会により「日本100名城」に富山県内から唯一選ばれた。

構造

郭は、本丸、二の丸、三の丸、明丸、鍛冶丸の五つからなるが、現在では「御城外」とされている小竹藪や梅林（当時の郭名は不明）も、これに加えるものと考えられている（本丸以外を馬出とする見方もある）。水濠は本丸西側のみが一重で他面は二重であるが、これは現在は市街地化しているものの、かつては本丸の北から北西にかけてが沼沢地であり、それを背面の護りとして本丸を他の郭でコの字型に囲む形の縄張りであったためである。基本的なプランは利長の先の居城であった富山城との類似性が見られ、その発展型とみることができる。今なお築城当時の濠塁をほぼそのまま残しており、総面積の約21万m²（71,261坪）の内、約3割（24,400坪）が人工の堀である。

本城の縄張りは高山右近によるものとするのが従来の通説であるが、近年、富山城とともに聚楽第型に分類し、右近が手がけた高槻城、船上城などの縄張り手法との比較から、それを疑問視する説も提示されている。（外部リンク参照）

廃城前に天守や櫓などが建てられていたかどうかは定かではなく、1612年（慶長17年）に写したとの記述のある現存最古の高岡城図には、天守予定地と目される本丸北隅には材木蔵と記されており、前田利長が高岡へ入城して3年後の時点ではいまだ天守は築かれていなかったものとみられる。廃城後の建物群に

については、現在知られている城図の中に、その配置や寸法を記したものがあり、大きなものでは、本丸に長さ24間（約43.4m）の米蔵が2棟、50間（約90.9m）の塩蔵が1棟あったことがわかっている。金沢城に今も残る三十間長屋や、近年再建された五十間長屋と同様の蔵が高岡城にも置かれていたものと考えられる。建築遺構は現存せず、石垣の一部や井戸が残るのみである。

Wikipedia による



古城公園内を散策してみよう

園内の気になるエリアをクリックしてください。

